

中学校の現場から——木村哲郎さんに聞く

編集部

はじめに

全県学力調査において小学校の成績は目標正答率を超えて関係者を安堵させた。他方、中学校はそれを超えられず、いくつかの問題点が提起された。それらについて現場の先生、木村哲郎さんに聞いた。

彼は、新潟市の中学校教諭で市の中学校教育研究会の社会科部長であり、「学力調査」問題をお聞きする最適の一人である。(編集部)

一、どんな風に調査は行なわれましたか

冬休みの指定された日に問題が送られてきました。それまでに学校によっては、宿題を特別に出すなど、対策的なことが非公式にとられたという話は聞きまし

た。業者(図書文化社など)学力テストと違い、実施までにも作業が多く大変でした。

問題自体は期末テストに近いようなもので、よくいえば現場的発想で作成されています。多分、県の指導主事たちが中心になり作成されたものでしょう。専門性や科学性にやや疑問の声も出ていました。

訂正のFAXが送られてくるなど、落ち着かない当日でした。

二、どんな困難がありましたか

社会科では習っていない項目が多くあって困りました。というの是一年生に地理、二年生に歴史、三年生に公民という型で進むのと、一、二年生で地理と歴史を並行的に学習する型があります。新潟市は前者の型もあ

ります。ですから一年生は歴史が未履修になってしま
います。その項目には未履修のサインをつけるのです
が、型の違う学校同士の比較はどの位データとして妥
当なのでしょう。

未履修の問題は他の教科にもあることで、ひとつの
尺度で測ろうとすれば、無理が生じます。

業者の学力テストは大学などと提携して、予備調査
をやり調査も膨大なサンプルで、検証を重ねています。
その点に限れば、学力の全国的な水準と比較するのに
利点があるでしょう。ただ一私企業へのテストが公的な
学力の基準のように扱われる事態も大いに問題です。

三、新聞に結果が公表されていかがでしたか

市町村別の発表でしたから、あまり刺激的ではなか
ったのが特徴です。各学校ごとに平均点などが出たら
もつと物議をかもしましたでしょう。

しかし、平均点を並べることにとどのような意義があ
るのか、いまだにわかりません。

四、結果を見ての感想はどうですか

経済的に豊かな地域が成績がよいのは、予想される
ことです。市内のある教員が、通塾率と学習に対する

意欲の相関関係を調べてまとめた論文があります。そ
れは通塾率の高い地域が成績も高いということを証明
しています。

朝飯を食べてきた生徒が成績が高いと報道されまし
た。食事は生活のひとつの指標であつて、朝飯が取れ
ないような子どもたちの生活が改善されることが求めら
れているのです。親の生活と深く関わって説明しなければ
意味はないでしょう。

五、この調査は今年度も実施です、どう見えますか

学力をすべての子どもたちに保障しようという提起
自体には大賛成です。ただ恐れるのは、学校の持つ多
くの教育活動が、学力向上の名の下にひとつの方向に
収れんされていくことです。

その学校の現状が、単純な測定しやすい尺度だけで
測られ、素人くさい「学力向上対策」が一人歩きする
のです。思春期の批判力もついてきている中学生がも
つと主体的に勉強できるように努めたいと考えます。

インターネットで学習したり、現実の政治や社会の
動きからも子どもたちが学んでいる事実を重視したい
と思います。

(文責・編集部)